

30余年前のおはなし 光陰矢の如し



一般社団法人 日本銅センター 会長
三井金属鉱業株式会社 代表取締役社長

西田 計治

私は、1980年(昭和55年)埼玉県上尾市にある伸銅事業部経理課(当時)に配属になりました。新入社員としての現場実習では、銅スクラップのプレス作業を経験し、電気炉で銅と亜鉛が溶かされる迫力に驚きました。

写真は、1983年(昭和58年)大阪造幣局で造られた貨幣です。当時、入社4年目をむかえ、事業部の主力製品である「伸銅品」の経理を任された記念に買ったものです。

この中で、アルミニウム100%の1円玉を除いて、すべての硬貨に銅が含まれています。銅の持つ赤い色が活かされているのは、10円玉と5円玉です。10円玉は銅とスズの合金である青銅製ですが、スズの割合は少なく純銅に近いそうです。平等院鳳凰堂が描かれているのが表、年号が記された面が裏。ここで、ちょっと脱線しますが、2006年に日本銅センターが行った実験で、10円硬貨に含まれる銅イオンの殺菌効果が確認されたことを強調しておきます。水たまりに10円硬貨を入れておくとボウフラが羽化しなくなるというのは、銅イオンの溶出によるものかと。

5円玉は銅60〜70%、亜鉛40〜30%だそうです。ずいぶんスペックに幅がありますが、これは原料がスクラップだったころの名残のようです。亜鉛が含まれている分、銅の赤い色と混ざり、黄金に似た色合いです。表面に稲穂、裏面に小さな双葉があります。

私としては、当社(三井金属)が亜鉛の会社という事で、亜鉛が含有されている5円玉の輝きを応援したいところですが、10円玉の銅の輝きは格別だと思いません。

私は、最初の配属地で5年余、伸銅、銅と亜鉛の世界を経験した後、次に、本社で銅事業の管理室に配属されました。振り返ると、銅・カパーに縁のあるサラリーマン生活のスタートでした。



30余年という時代を感じる貨幣ケース

中央の六角形の金属板はこの貨幣セットの製造年を示すもの

銅 目次

- 2 カパーロマン
30余年前のおはなし〜光陰矢の如し
西田 計治
- 3 銅の歴史物語
銅が海生生物の付着を防ぐ
船底を守る赤い塗料
- 4 ルポルターージュ
世界最大級の銅製錬所
100年の積み重ねを次の100年へ
- 6 ユーザー訪問
銅製品を効果的に使用し
省エネを推進!
- 8 リレー随想
農業、ナビコリーそして銅
白杵英樹
- 10 リサイクルに挑む
日本の銅製品づくりを支える
リサイクル原料
- 12 カパーワールド
7基の銅釜で炊き上げ
旨味・色艶を引き立てる
- 13 カパーワールド
着眼点が光る
銅の殺菌効果を活用した排水システム
- 14 銅センターニュース
トピックス